

東洋研究所研究報告会「国際交流講演会」二〇一八年二月十七日（土）

江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額—群馬県世良田東照宮本の伝来と系統—

オレグ・プリミアニー

東照宮は、江戸幕府を開いた徳川家康を「東照大権現」として祭祀する神社であり、現在、全国各地に五〇〇社以上が存在する。徳川氏発祥の地とされる上野国徳川郷（群馬県太田市）の世良田東照宮は、寛永二十一年（一六四四）、三代将軍家光が日光東照宮から勧請し、社殿の一部を移築したものであり、群馬県指定重要文化財の三十六歌仙扁額（以下、世良田本と略称）が伝来する。

三十六歌仙扁額とは、東照宮建築の基本様式とされ、三十六首の歌仙和歌に歌人の肖像画を添えた三十六面の扁額が、神社の拝殿内部の上壁を囲むようにして配される。

世良田本の伝来について、額賀大直編『東照宮宝物志』（一九二七年、日光東照宮）は、元和年間日光東照宮に奉納され、世良田東照宮が完成した寛永二十一年（一六四四）に神饌・鎧・太刀・東照大権現勅額とともに移管されたとする。一方、日光東照宮には、元和三年（一六一七）の後水尾天皇宸翰の三十六歌仙扁額（日光本）が伝来する。

もし、世良田本が日光東照宮から移管されたものであるならば、元和年間、日光東照宮にはふたつの三十六歌仙扁額が存在したことになる。

世良田本の歌仙絵について、美術史の松木寛氏（「世良田東照宮の三十六歌仙絵額」『東京国立博物館美術誌』394号、一九八四年、東京国立博物館）は、その画風から落款に見える狩野源四郎（一六一三～一六八五）・休白（一五七七～一六五四）・元俊（一五八八～一六七二）の実作であり、寛永末年に制作と指摘された。

さらに、日光本の歌仙和歌本文は、二代将軍秀忠の依頼により、後水尾天皇が「世尊寺芳翰」を「模写」したものである（「十一月晦、曼殊院門跡良恕法親王宛、後水尾天皇宸翰」『久能山叢書第四編 資料編下』一九七六年、久能山東照宮社務所）。

もし、世良田本が日光東照宮から移管されたものであるならば、その歌仙和歌本文は、日光本、さらにはその祖本である「世尊寺芳翰」に一致するはずである。

世良田本（藤原仲文一首は剥落）と日光本の歌仙和歌本文を精査したところ、両者は十六首が一致し、十九首が異なっていた。歌仙和歌が一致する十六首のうち、四首の散らし書きの書式はあきらかに異なる。このことから、世良田本は、元和年間日光東照宮にあった後水尾天皇宸翰の日光本ではないと考えられる。